

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第53号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Page 1 ……

巻頭言

沖永良部の花だより

高橋 誠一

Page 2 ……

卒業生だより

20年ぶりの不思議な巡り合わせ

上村 要司

学窓から

地理を学んで

堀阪 純代

Page 3 ……

一泊巡検報告

紀ノ川右岸と高野山

谷口 修

平成16年度会計報告

卒業生の動向

Page 4~5 ……

研究ノート

土佐国高岡郡久礼における天正期の集落形態

片岡 健

Page 6 ……

関西大学地理学研究会会員の皆様へのご連絡

卒業生・修了者提出論文題目

Page 7 ……

事務局だより

Page 8 ……

随想

琵琶湖との出会い

中西 正己

新入会員より

Page 3, 6~7

新院生紹介

Page 7

12月だというのに台風の影響で雨風が強くなってきた。急な坂道でUターンをしようとして転倒してしまった。2004年、沖永良部島のことである。

膝の擦り傷以外は、負傷していないようであるが、バイクのバックミラーが折れてしまった。名村モータースに戻ってあやまり、修理費とレンタル代金の支払いを申し出た。ところが名村秀男さんと娘婿の平山光善さんは、そんなことより怪我の手当てをと救急箱を出してください。「私のところは、レンタバイク屋でもないし、遊んでるバイクですから、レンタル代なんてとんでもない。ミラーなんて安いものです。それよりせっかく調査に遠くからおいでいただいたのにこんな天候でもうしわけないことです」と言って、修理費もほんの形だけしか受け取ってもらえなかった。

この夜、「おきえらぶフローラルホテル」近くの民芸居酒屋「栄里周」でその話をすると主人の轟 勝治さんと芳美さんは「名村さんってほんとにいい人ですよ。あの家族の悪口なんて聞いたことないなあ」と言った。

実は前夜、ホテルで夕食をすませてフロントの栄 春香さん（後日、名前を聞いた。いきなり名前を聞くほど積極的ではありません。念のため）に、近くにいい飲み屋がありますかと問うと、「エリス」の奥さんともいい人ですからと教えてもらった。早速行って、息子の栄作君と周作君にも会った。聞けば妹の麻里奈ちゃんは沖縄舞踊集団の「花やから」に所属していて9歳のときから沖縄の師匠の内弟子になっているという。麻里奈ちゃんへ元気であるかいというメッセージで「さんまのカラクリビデオレター」に二度も登場した家族である。意気投合して、みんなでカラオケスナック「チャンピオン」。ホテルへ戻ったのは12時ごろだった、と思う。

三日目は芳美さんの紹介で沖永良部郷土研究会会長の先田光演さんに会って教えてもらったが、ホテルへもどったところから肋骨が痛み始めた。フロントでもらったシップを貼って、雨の

中をエリスへ行った。

帰宅して病院で診察をうけると肋骨にひびが入っているとのことであった。まだ痛みが残る年末に、名村さんから、黒糖焼酎と野菜やお菓子が送られてきた。お礼の電話をすると、「今度はいつお見えになりますか」と。痛みのことは言わなかった。年がけて轟さんから大きな箱いっぱいの花が届いた。沖永良部は花栽培の島である。冬の自宅がまるで春のような香りと色彩に満ち溢れた。電話をすると「先生、また近いうちに来てよ」との誘い。

2月になって再訪した。一日目はエリスで平山さんと名村さんの末娘の由美子さん、その友達の春日里美さんと飲んだ。二日目は先田さんに案内してもらってから、名村

沖永良部の花だより

高橋 誠一

さんのお宅でご馳走になった。大島新聞の記者である斎藤美穂さんも来た。彼女、ヨロンのタケサンから聞いたけれど、与論島の本を出版されるんですねと言う。三日目、秀男さんと遊んでからホテルへ戻ると、ナカニシヤ出版の吉田千恵さんから本が完成しましたとの連絡がはいった。非番の春香さんが今夜は一緒にエリスへ行こうと言う。彼女の家族や親戚と一緒に飲んでいると役場勤務のお父さんの信一郎さんもこられた。みんなでカラオケへ行った。

翌日、春香さんの車で栄家のサトウキビ刈の見学をさせてもらったのち、ホテル副支配人の清水栄美さんと話しをした。彼はなんとかして沖永良部を活性化したいという。与論島に残る琉球の原風景と沖永良部の花などを組み合わせた観光活性化を図れないかと言うと、筆者の本に興味を示してくださった。エラブとヨロンは兄弟島だからホテルの売店コーナーに筆者の本をおいていただけることになった。後日、清水さんからたくさんの花が届いた。大島新聞に本のおことが大きく紹介された。僕と竹さんの写真も載っていた。5月、春香さんから電話があった。「先生の本、チョコ売れてるよ。ハルカもうすぐ大阪へ行くからね」とのことであった。兄弟（姉妹）島通いはまだまだ続きそうな雰囲気になってきた。（本学教授）

卒業から早くも20年。大阪で就職したのも東の間、名古屋・東京へと転居し、しばらく関西から遠ざかっていました。しかし昨年、大阪転勤を命じられ久々の関西暮らしに慣れてきた頃、投稿依頼のお声がかかりました。

一昨年、関大が会場だった人文地理学会大会で偶然にも研究発表の機会を得て、懇親会で指導教授であった柿本典昭先生や、末尾至行先生、在学当時の先輩や後輩など懐かしい方々にお会いしました。そして昨年秋の人文地理学会大会で、学部時代の先輩だった長崎大の石川雄一先生から伊東理先生をご紹介いただきました。卒業以来ほとんど音信不通だった私が、ここ1~2年の間に地理学教室の方々と再びお近づきになれた印象です。

卒業後ハウスメーカーに就職した私は、20代後半で現在のコンサルタント会社に転職し、工学系の人間に混じって全く素人だった交通計画分野で総合交通体系調査などを経験しました。お世辞にも理数系と言えなかった私ですが、とりあえず計数処理がこなせるようになり、本来関心があった住宅・不動産分野に配転。以来、住宅マスタープランの策定や不動産市場の分析などに携わっています。実は、今も東京の某・大学院博士後期課程に在籍しているのですが、転勤や子供の誕生など公私の事

情にかまけて、博士論文は遅々として進んでいません。今回、千里地理通信で学位を取得された方々を拝見し、改めて身を引き締めねば、と思った次第です。

私の学生時代、地理学出身者の就職先といえば、公務員、教職、旅行会社、それになぜか住宅・不動産会社が多かったと記憶しています。今はコンサルタント志望も多いようですが、この春の会社説明会で来年の新卒予定者と話した際、今の学生さんは競争が厳しい分、(特に女性は)積極的で優秀という印象を持ちました。この仕事は正直いって激務で、年に修論や卒論を4~5本書く位の業務量を抱える時もありますが、当該分野に対する強い関心と問題意識があれば、やりがいのある仕事だと思っています。

今の事務所は偶然にも私を含めて関大出身者が3名おり、業務をサポートするアルバイトにも現役の関大生がいます。図らずも大阪に戻ったのですが、色々な面で母校との不思議なつながりを感じています。伊東先生からは大学に遊びに来るようお誘いもいただき、図々しくも近々お邪魔したいと考えています。後輩の皆さんとの意見交換も楽しみです。せっかくの巡り合わせ、この機会を大切にしたいと思っています。

(株)日本能率協会総合研究所

学窓から

地理を学んで

堀阪 純代

6月のある日、高橋教授より「地理を学んで」というテーマで文を書くように言われた。言われてみれば地理を学んで3年半、そんなことなど一度も考えたこともなかったし考えようともしていなかったのだが、大学生活を振り返る良いチャンスかもしれないと思ひきうけることにした。

私にとって、大学生活の思い出の大半が地理での思い出である。千里山周辺・枚方・池田・滋賀・沖縄など様々な土地へ巡検に行ったこと、大学内を測量したこと、コンパ、野間先生とともにカラオケに行ったことだ。数えればキリがないが、中でも一番の思い出は3回生時に行った沖縄実習である。

私は歴史班に所属しており、現地では旧首里城下町範囲内の道を一本一本、住宅地図を見ながら石取當と呼ばれる魔除けの石札を探すという作業を行った。10月の沖縄はまだまだ暑く、太陽が燦々と照りつける中、全く知らない土地を黙々と歩き続けたのは今思い返すだけでしんどさが体によみがえってくる。坂道や階段も多く、中には「これは本当に道なのか?」と思うような雑木林

を通ったこともある。この雑木林には「ハブ注意」と書かれた看板が立っており、「これは石取當を探すところじゃない」とハブに脅えながら全力で駆け抜けた。全く見知らぬ土地を一人で歩くという孤独感、照りつける太陽と坂道に体力を奪われ日焼け止めを塗りなおす気力さえなく、ハブの脅威にさらされ、極めつけは長年愛用していたペンをこの調査中に無くしてしまい、本当に泣きそうになった事が沖縄実習で一番に思い出される事だ。

しかし、悪いことばかりではなかった。一緒に実習に参加した琉球大学の女の子と仲良くなり現在でも連絡を取り合っている。調査終了後に行われたコンパでは、高橋教授と普段できないような話をした。最終日にはレンタカーを借り、友達と沖縄観光にでかけた。そして調査で辛い思いをしたことさえ、今ではいい思い出となっている。卒業論文作成を目前に控え、卒業する時には「卒論もいい思い出だった。地理を学んで本当に良かったな。」と思えるような卒論を書こうと意気込んでいる。

(本学学部4回生)

一泊巡検報告

紀ノ川右岸と高野山

谷口 修

新入会員より

今年の一泊巡検は、6月4日(土)から5日(日)の2日間の日程で行なわれた。目的地は和歌山県北部に位置する岩出町など紀ノ川右岸の地域と高野山である。阪神高速・近畿自動車道・阪和自動車道を経て最初に到着したのは那賀郡岩出町である。岩出町は和歌山市の東の郊外に位置し、交通の利便性に優れていることから近年人口増加が著しい都市である。ここでは主に、市街地外縁部の中島などに見られるスプロール現象を見学することとなった。見学してみても率直な感想は、「違和感がないなあ」というものだった。というのも、私の出身は佐賀県唐津市で、田んぼの中にマンションや住宅が建っている風景には見慣れていたのである。その後、町の北西部にある紀泉台住宅をバスで通過し、次に到着したのは根来寺である。根来寺は、豊臣秀吉による「根来寺焼き討ち」(1585年)が有名で、戦火を逃れた多宝塔には火縄銃の弾痕が残っていて歴史好きの私には大変興味深いものだった。その後、地元の農産物を生産農家が持ち寄り販売している打田町の「めっけもん広場」(一施設あたり販売高日本一)や那賀町で華岡青州生家跡の農業交流施設「青洲の里」で紀ノ川の地形を観察した。さらに高野口町のパイル織工業の製品や工場(土曜で休み)を見学の後、宿泊する高野山へ向かった。

高野山は今回の巡検で最も興味を持っていたところだったが、そこは想像以上の場所だった。山上までに見えた景色は、本当にこんな深い山の上に町があるのかと疑いたくなるほど陰しく、昔は登るだけで修行だったというのにも納得がいった。予想よりも商店などがあ

が、山上はまさに霊場といった独特の雰囲気にも包まれていた。その日宿泊したのは大円院という宿坊で、本堂をもつ立派な寺院である。宿坊に宿泊するのは初めてで不思議な気持ちだった。しかし、寺とは言っても個室や食事をする部屋があり、それほど旅館とかわりはなかった。食事でも学生が食べるとあって精進料理ではなく、肉類などが用意されていた。翌日は朝6時から勤行に参加した。慣れない正座で足がしびれたが、張り詰めた空気の中の読経に圧倒された。この日は、金剛峰寺と奥の院を見学して回った。

奥の院へ続く参道の脇には、織田信長や豊臣秀吉・武田信玄・石田三成など多くの歴史的人物の墓をはじめ、ユニークなところでは白蟻の墓などもあり高野信仰の奥深さを感じた。

今回の巡検では高野山をはじめ貴重な体験をすることができた。10月には紀ノ川右岸の調査研究があるが、これから非常に楽しみである。(本学3年生)



根来寺(和歌山県岩出町)境内での記念撮影(6月4日)

文 04-18

安宅真生
地理は元々好きでしたが、授業を通してもっと好きになりました。これからは知識を深めていきたいと思います。

文 04-97

上野修平
どこか速くに旅にでたくまりました。よろしくお願ひします。

文 04-288

久保佳美
世界地図を見たり、自転車に乗っていろいろな所をまわるのが大好きです。地理は将来のためにとても役立つと思います。よろしくお願ひします。

文 04-291

久米康絵
旅行はもちろん好きだし、地理の勉強は一生役に立つと思って地理にきました。先生もいけばかりで授業も楽しいです。よろしくお願ひします。

文 04-372

上土井舞
地理には様々な研究があり、多くを学べると思って地理を選びました。地理を通して知識を深めていきたいです。よろしくお願ひします。

文 04-395

高島正樹
自転車で旅をするのが大好きです。幼い頃から旅行によく行ったので方向感覚に自身があります。よろしくお願ひします。

)))))) 平成16年度会計報告 ((((((

〈収入の部〉

前年度繰越金	154,520 円
会費収入	152,500 円
計	307,020 円

〈支出の部〉

会報印刷費	73,500 円
通信費	32,785 円
巡検資料印刷費	2,368 円
計	108,653 円

〈平成16年度差引残高〉 198,367 円

以上報告申し上げます。

(会計：生地泰明，白澤武蔵)

卒業生の動向

・1970年学部卒の山本文彦氏は2005年4月に兵庫県立村岡高等学校長に就任されました。

・1971年学部卒で74年院修士課程(当時は日本史学専攻)修了の前川太一氏は、奈良県下各地の高等学校や教育委員会で要職を歴任され、県立添上高等学校長に次いで2004年4月からは県立高円高等学校長に就任されました。

・1993年院修士課程修了の瓜本美穂さん(大阪外国語大学モンゴル語科卒)が2005年3月に、ジョン・フレンド氏によるヨガに関する書物 Anusara Yoga -Techer Training Manual の日本語訳本を出版されました。

土佐国高岡郡久礼における天正期の集落形態

片岡 健

1. はじめに

筆者は先に高知県南国市の臨海部において『長宗我部地検帳』をもとにミクロなレベルで天正期の集落形態を復原した¹⁾。本稿では同様の研究目的・手法により、高知県高岡郡久礼に存在した天正期の臨海集落を復原する。

『長宗我部地検帳』の当地域の検地記録である『久礼分地検帳』²⁾ (以下、『地検帳』と略記) には、「町ヤシキ 浜ヤシキ」と記された合計 19 筆の連続した屋敷が記載されている。また、「浜ヤシキ内外懸テ」とあり、合計 18 筆のはぼ連続した屋敷が記載される。

2. 「町ヤシキ 浜ヤシキ」「浜ヤシキ」の周辺地と屋敷配列

まず、『地検帳』に記載されるホノギ (小地名) をみることにより、久礼の検地された地を確認すると (図 1)、久礼八幡宮が鎮座する小字「松原」周辺がホノギ名からすると検地されているか不明である。これは『地検帳』に記載されたホノギ名を継承する小字名がないためであるが、同じ臨海部でもこの西側は検地されており、また「浜ヤシキ」という名称を含むことから、2つの屋敷並が臨海部に存在した可能性が想定され得る。

そこで、臨海部の地形を検討する。2500分の1の地図上に記された臨海部における各地点の標高をみると、浜堤が現在の海岸線に沿って発達していることを確認できるとともに、検地されたか不確定である小字「中島」「東中島」「築屋舗」「南新

改」がいずれも標高 2.0 m 以下であることが判明する。また地籍図によると、これらの4つの小字内の土地利用は現在とは大きく異なり南辺部を除いて田または畠であり、また小字「南新改」はかなりの面積を占めるにも関わらず、地番 6222 と地番 6224 という2つの地番からだけで構成されることが注目される。2500分の1の地図及び現地調査によれば、4小字の外周を取り巻く道路が存在し、これに沿って小河川が現在の久礼港 (内港) に向かって流れていることが確認できる。以上のこの地の特徴から、かつてこの地は久礼川河口部における浜堤背後の潟湖であり、後に干拓されて陸地化したと推定される。

検地された天正期から時代が下るが、安永7 (1778) 年の『西浦廻見日記』には、「焼坂をおりて久礼浦也、郷も広し、川みなと砂にてうづもれ舟の出入になやむ、むかしハ廻船など自由に入しよし、(以下略)」とあり、この記述からも上記の4小字はかつて潟湖であり³⁾、ここが港として利用されていたことがわかる。また、『南路志』には久礼の項で「湊入海」とあり、この入海がその存在が推定される潟湖を指している可能性もある。

したがって、先の検地順の検討において検地されたか不確定であったのは、天正期にこれらの地が潟湖であり陸地化していなかったためと考えられる。このため、2つの屋敷並は推定される潟湖以外の地に想定される。

次に、『地検帳』の記載を基に屋敷の配列と面積を図化し、屋敷品等・土地利用を示す (図 2, 図 3)。図 2 によれば、「町ヤシキ 浜ヤシキ」の屋敷並は西から東、東から西と検地されることを繰り返しつつ次第に北から南へと検地が進み、総体的に南北に屋敷が配列していた。また、この地区の 19 筆の屋敷のうち、15 筆までが上屋敷として品等づけられ、残りの 4 筆が下屋敷であり、また上屋敷と記載された屋敷はこの地区の北部・中部を占め、下屋敷と記載された屋敷は南部に集中している。



図 1 久礼の小字分布

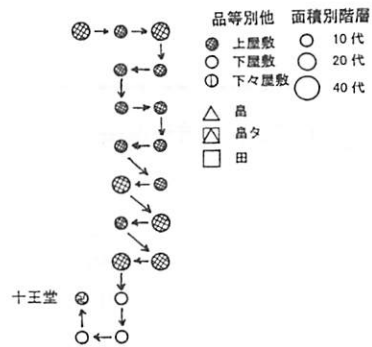


図 2 久礼町ヤシキ浜ヤシキにおける屋敷地検地順

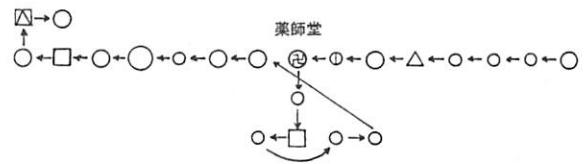


図 3 久礼浜ヤシキにおける屋敷地・畠地等検地順 (凡例は図 2 に同じ)

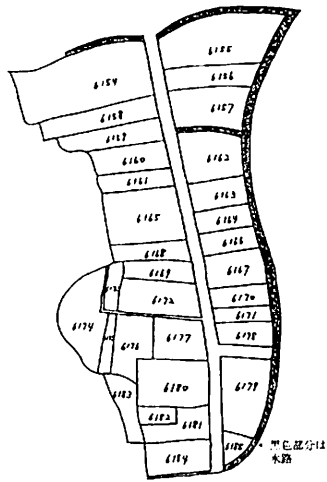


図4 小字「下ノシロ」の地籍図

図3によれば、「浜ヤシキ」の屋敷並はこの地区の東部分から検地が始まり、薬師堂の前方にある4筆の屋敷以外は、最後部の2筆を除いて東から西へ検地されており、総体的に東西に屋敷が配列していた。またこの屋敷並は、18筆の屋敷のうち17筆までが下屋敷として品等づけられ、残りの1筆は下々屋敷というように、品等が低い屋敷のみで構成されている。

3. 「町ヤシキ 浜ヤシキ」「浜ヤシキ」の比定

「町ヤシキ 浜ヤシキ」の屋敷並と「浜ヤシキ」の屋敷並のそれぞれについて比定を試みたい。

まず、「浜ヤシキ」の屋敷並を検討する。その際に、この屋敷並の一部を構成する薬師堂がこの屋敷並比定の鍵になると考えられる。土佐国藩政時代の地誌書である『土佐州郡志』に「金沙寺禅宗在八幡社東常賢寺ノ末」とあり、それ同様に藩政時代の地誌書でより後世に作成された『南路志』に「由王山金沙寺禅宗退転 先年は薬師堂言後金沙寺と改」とあることから、薬師堂は八幡宮の東方にあったと推定される⁹⁾。

浜ヤシキの検地記載は図3に示したように、内部に畠と畠田を含む。そしてこの屋敷並に続いて、畠4筆及び畠田2筆が記載される。これらの耕地には一部に田もみられるが、大部分は畠を中心とした地目構成であり、これはこの地が水田には基本的に不向きな土地であったためと考えられる。また「浜」の名称からしても海岸に近接していた可能性が高い。このため、「浜ヤシキ」の屋敷並は久礼湾に面した浜堤上に存在したと推定される。

次に、「町ヤシキ 浜ヤシキ」の屋敷並を検討する。そこで、「町ヤシキ 浜ヤシキ」の屋敷並の最後に記載された十王堂の注記の「同しノ上」に注目したい。『地検帳』には「上」という記載が少ないため、この記載には意味があると思われる。図14では、「上」を北という意味で作図しているが、『長宗我部地検帳』の記載からして、これは高低を表わす「上」の可能性が高い⁹⁾。この場合、十王堂は直前に記載される屋敷よりも高い地に存在することになる。

この想定の場合に注目されるのが小字「下ノシロ」である。この地には奥行の短い短冊型地割が認められる(図4)とともに西側が山であり、十王堂が屋敷並の西部に想定されることと一致する。このため、「町ヤシキ 浜ヤシキ」の屋敷並は小字「下ノシロ」に存在したと推定される。

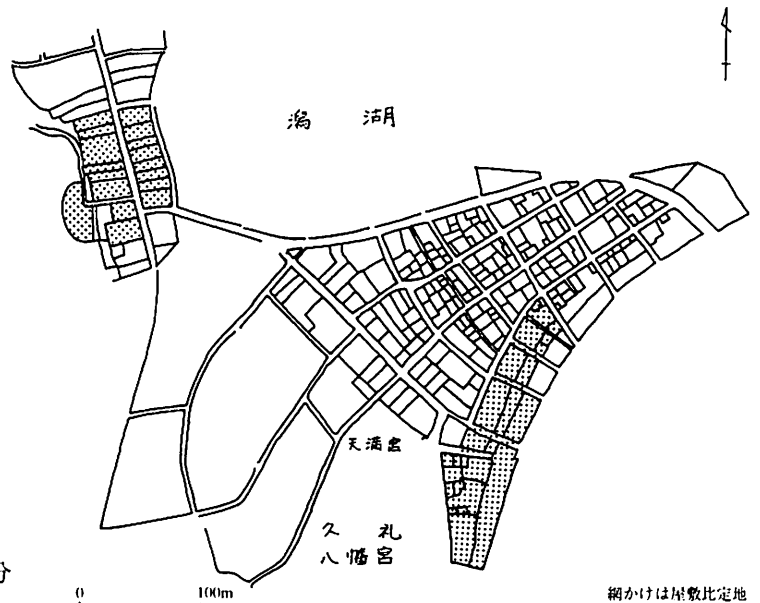


図5 久礼における天正期の集落形態

以上の考察を基にして、『長宗我部地検帳』に記載された屋敷面積の検討結果を示すと図5のようになる。

4. おわりに

本稿では、2つの屋敷並が浜堤上と濁湖に面して存在したことを明らかにした。これらの久礼の屋敷並は当地に本拠があった国人領主佐竹氏の城下市町であり、文禄2(1593)年に長宗我部盛親から材木に関する書状が出ていることから津としての機能を有していたと考えられる。

今後、土佐国内の岡豊⁶⁾、黒岩⁷⁾などで復原事例を積み重ねていきたい。

(本学大学院・文学研究科博士課程後期課程)

【付記】

現地調査では久礼在住の林勇作氏に御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 片岡健・高橋誠一「土佐国香長平野臨海部における天正期の集落形態—高知県南国市浜改田の事例—」史泉 90, 1999, 1-21頁。
- 2) 『長宗我部地検帳高岡郡下の一』, 高知県立図書館, 1963所収。
- 3) 空中写真(米軍撮影, M 557-2, 3, 4)による検討では、これらの小字を含めた地が地下水位の高いことを確認できる。
- 4) これについては既に林勇作氏が指摘している(『久礼, 上ノ加江の漁村・漁業史について』土佐史談 185, 1991, 123-130頁)。
- 5) 『長宗我部地検帳長岡郡上』, 高知県立図書館, 1958, 238頁(『蚊居田村地検帳』)には、「同しノ上」と右肩に付された筆があり、次の筆に「同し北」と記載される。このことからすると、「上」と「北」は使い分けられている可能性が高い。また、岡豊山の南にも「上」という表現が散見される。
- 6) 片岡健「戦国末期土佐国における岡豊市町復原の再検討」日本地理学会発表要旨集 60, 2001, 134頁。
- 7) 片岡健「戦国末期土佐国における国人級城下町の復原—高岡郡黒岩を事例として—」(第84回歴史地理研究部会口頭発表要旨)人文地理 54-3, 2002, 311-312頁。

文 04-411

田頭沙織
地図や地誌の勉強をして、地図を片手に日本中を旅したいです。よろしくお願ひします。

文 04-413

田口史記
自分と違った文化を知ることができ、視野を広げられると思い地理を学ぼうと思いました。よろしくお願ひします。

文 04-421

武田和樹
一日中夜も眠らずずっと地図帳をニヤニヤ眺めてます。ウンです。でも地図好きです。よろしくお願ひします。

文 04-456

田橋智美
木庭先生に憧れて地理を勉強したいと思いました。自然地理をやりたいです。よろしくお願ひします。

文 04-532

中島千恵
いつも笑顔で講義をされる魅力的な地理学の先生方を見てこのコースを選びました。よろしくお願ひします。

文 04-723

前野真慶
高校のときは山岳部で地形図を見るのが好きです。これからよろしくお願ひします。

文 04-785

三宅雄大
道路地図を見てるだけでドライブしてる気になっている野球好き野郎です。ボケてる所が多々ありますが、よろしくお願ひします。

1. 日帰り巡検のご案内

今年も恒例の日帰り巡検を行います。今回は堺東駅から刃物製作所まで、堺市の旧市街地・都市再開発や伝統産業などを見学する予定です。

日時：平成 17 年 10 月 23 日（日） 10 時 30 分～16 時 30 分（予定）

集合：南海電鉄高野線 堺東駅西口（南側） 10 時 20 分改札を出たところに集合

巡検ルート：堺東駅→堺市役所屋上→堺東駅前商店街（堺銀座街・昼食）→土居川公園→大小路→堺駅前再開発→阪堺電鉄（大小路→妙国寺前 運賃 200 円）→刃物伝統産業会館→西本願寺堺別院（門前町見学）→藤井刃物製作所（刃物製造見学）→南海本線七道駅（現地解散）

その他：雨天決行。堺銀座街散策後、昼食と致します。持参されるお弁当を食べる適当な場所は少ないのでご注意下さい。なお、飲食店は堺東駅周辺に多くございます。

申し込み：10 月 17 日（月）までに地理学大学院生室（06-6368-1121 内線 4689）まで電話、葉書等でご連絡いただくか、吉兼（bd4m704@ipcku.kansai-u.ac.jp）まで電子メールにてご連絡下さい。今回の案内責任者は M2 の岡田良平・森本英揮・吉兼崇博です。

2. 第 86 回研究例会（予告）

日時：平成 17 年 12 月 10 日（土） 15 時開始 18 時懇親会の予定

会場：関西大学文学部第 1 学舎 第 3 会議室（3 階）

講演予定者：水田憲志（関西大学・博士課程後期課程）：「日本植民地時代台湾における在留日本人の諸相」

上村要司（日本能率協会総合研究所）：「シンクタンク・コンサルタント業界に身を置いて一昨今の業界事情など」

木庭元晴（関西大学）：「いま、研究していること」の 3 名

平成 16 年度地理学卒業論文・修了論文

地理学（第一部）

茨木市の森林植生成因 —いわゆる二次林境界との関係— 北野 航
「ヤマト」における「ウチナー」伝統芸能・文化継承と側面

—大阪府大正区の文化振興活動を中心に— 黒木智恵子

大阪府のアカマツ林の優占的分布 小山 敦

大阪大都市圏の百貨店の立地と店舗特性 西村規子

大阪城公園の渡り性カモ類の飛来特性 畑りつ子

宅配ピザチェーンの店舗展開と立地条件についての考察 —大阪・兵庫（阪神間）を中心として— 東山崇広

紀州黒江の漆器業と歴史的街並み 堀内進也

奈良町の歴史的景観形成とその変容 正田真一

大阪伝統野菜の復活 米本慶子

求人誌「フロム A」における雇用形態 —大阪府を事例にして— 二本柳亮

千里ニュータウンにおける高齢化と高齢者福祉 小田真玄

壮年谷の段丘分布 —揖斐川北西部源流坂内川を例に— 水上洋子

映画興行におけるシネマコンプレックスが与えた衝撃

—大阪大都市圏における映画館の立地状況から— 柳本大輔

中・長距離輸送における高速バスの実態と可能性についての考察 —近畿発着路線を中心として— 高林直澄

地理学（第二部）

京都府和知町における集落営農の盛衰 谷川喬人

神戸市西区伊川谷における軟弱野菜の展開 —都市近郊農業の生き残り— 吉岡浩史

枚方市域における住宅地化の進展と交通体系 駒田剛史

修士論文

庶民の味お好み焼きをめぐる地域文化の一考察 前田 倫

地方の新しい工業地域と大都市圏の中小企業工業地域の比較研究

—鳥取県と大阪府東大阪市（高井田）を事例として— 中西 浩

事務局だより

■平成17年度の学部地理学教室新入生は17名の多きを数えました。4月22日(木)夜に「すっぽん」で歓迎会を開催しました。地理学教室の3回生は19名(1名は編入)、デイトタイム4回生20名、フレックス4回生3名、大学院博士課程前期課程は2名の社会人M1を迎え、M2とあわせて10名です。博士後期課程はD1には学内外から進学者はありませんでした。大学院生は総勢27名となりました。

■恒例の「地理学実習」のバス1泊巡検は、6月4～5日の1泊2日で、木庭、伊東、野間の3教員と18名の3回生と大学院生、卒業生も加えて総勢35人で紀ノ川右岸と高野山で実施しました。見学地の記録は本誌の「一泊巡検報告」をご覧ください。

■地理学実習や調査研究法、演習などの共同作業・研究などの機器として、地理学実習室にノートパソコン3台と製図ソフト、PCプロジェクター1台を日本学術振興会予算(委託経費科学研究費)で購入しました。

■文科省の学術研究フロンティア事業の採択によって、東西学術研究所の下にアジア文化交流センターが4月設立されました。その施設がはいる学舎が法科大学院等の建物に隣接して建設されている建物です。ただ、残念なことは、カフェテリア「一休」や地理学の旧大学院生があった村野藤吾設計の瀟洒な歴史的建築が保存されることなく、取り壊されました。なお、東西研所長には橋本征治教授が4月から就任しています。地理学からは末尾至行(名誉教授)先生以来の所長です。

■高橋誠一教授を代表とし、教室の教員全員が分担者となった日本学術振興会科学研究(基盤研究B)が採択され、4月から3年間の共同研究が始まっています。「南海地域における琉球の歴史地理的実体と意味の総合的研究」がテーマです。

■大学院合同演習は7月16日13時～19時に地理学実習室でM2の生地泰明、山崎直、森本英揮、松井幸一、堀内千加、岡田良平、吉兼崇博、尾崎美佳の8名が修論中間発表行い、Dコース院生、卒業生を交えて白熱した議論が展開しました。

■非常勤講師として毎年ご出講いただいた杉本尚次、坂本英夫、石原照敏、木全敬蔵の4先生はこの3月の年度末で、定年規定により退かれました。本学に対しての長年の学恩に深くお礼申し上げます。

■今年度新たに非常勤講師としてご出講いただいた先生は、大学院ご担当の八木康幸(M文化地理学、D文化地理学研究、関西学院大学)、目崎茂和(南山大学)のお二人です。

■平成17年3月～8月までの教員の海外出張は以

下の通りでした。橋本征治：①台湾(3月16日～29日)、②台北、台東、蘭嶼、高雄(大学院生の水田憲志が同行、日本学術振興会科学研究費)、③伊東理：アメリカ合衆国(3月15～28日、シアトル、デンバー、アトランタ、日本学術振興会科学研究費)、野間晴雄：日本学術振興会委託研究費による「インドの地理学事情の情報収集と港市スーラトの調査」(7月23日～8月4日、インド)

■4月から個人情報保護法が施行されたことに伴い、これまで秋号に卒業論文、修士論文題目一覧とともに掲載していた連絡先は今回の号から掲載を見合わせることにいたしました。「千里地理通信」は地理学教室のニューズレターの性格をもつ刊行物ですが、卒業生のみならず関大図書館等にも配布していることから、不特定多数に公開されていることを考慮したためです。これまでも「研究ノート」等の論考に対して、第三者から図書館や教室に複写依頼がありましたが、今後、そのような希望者には実費にて千里地理通信の一部を配布することをご了承下さい。

いっぽうで、毎年増えてくる卒業生を前に、同窓会としての名簿管理は必要です。また、卒業生同士の連絡の便宜も考慮して、関大地理学教室の卒業生、現役学生、教員に対してのみ別紙として連絡先一覧を同封しました。ご理解いただければ幸いです。最近、多くの会誌が宛先不明で返送されてきます。住所変更された場合は、ぜひ、教室まで葉書、メール等でご一報下さい。

■高橋誠一教授が長年研究されてきた、与論島に関する本を出版されました。タイトルは『与論島 琉球の原風景が残る島』(ナカニシヤ出版 1,900円)です。与論町役場にお勤めの竹盛窪さんとの共著となり、お二人の美しい友情を満載し、豊かな歴史的伝統が残った与論島への熱い思いが込められた読みやすい一冊となっております。御一読下さいますようお願い申し上げます。

■4月16日(土)関西大学天六学舎で人文地理学第254回例会、4月23日(土)に100周年記念会館で経済地理学会関西支部例会が開催されました。前者は「鉄道と地理の愉しみ」(関大OBの三木理史氏[奈良大学]発表)、後者は「若手研究者の関心と経済地理学の近未来」(松原光也さん[大学院博士後期課程]発表)をテーマとしたもので、いずれも会場満杯の盛況でした。天六での例会後、水谷彰伸さんを中心として大学院博士後期課程の大学院生による天六ミニエクスカーションも行われました。

文 05-3001

加藤正貴
自然環境それ自体と
その人とのかわりに
興味をもち、それを
研究したくなったので
地理に編入してきました。
よろしくお願ひします。

新院生紹介

05M2081

白澤武蔵
毎回の講義や演習は
難しいことが多いで
すが、新しいことが多
くてついていけるかな
と不安ですが、学ぶこ
とに事欠かさな院生
生活です。

05M2082

家根由秀
時間に追われ毎日ば
たばたしていますが、
学ぶ気持ちを忘れず
に謙虚にいたいと思
います。よろしくお願
ひします。



竹盛窪氏との共著『与論島—琉球の原風景が残る島』

琵琶湖と出会ったのは今から37年前、1968年である。それは世界の人口爆発に対しする食糧不足が懸念され、ユネスコが窓口となって食糧の確保の基礎を生物群集の生産力に求めて始まった「国際生物学事業計画—IBP (International Biological Program)—1965—1974年」と密接に関係する。この事業計画は、地球表面を覆う森林、草原、海洋、陸水域(湖沼・河川・湿地)を調査対象として、生物生産の基盤となる植物が光合成によって水と二酸化炭素からどれだけの有機物(食糧の基盤)を生産することができるかを地球規模で評価すること主目的にしていた。琵琶湖は貧栄養湖沼の代表調査水域として、1966年にIBP委員会で選ばれた。琵琶湖の一次生産(有機物生産)の担い手は、沿岸水域では水生高等植物(水草)、植物プランクトン、付着藻と多様な構造を示すが沖合水域では植物プランクトンである。琵琶湖ではこれら植物の現存量及び光合成による有機物生産速度

の測定出来る人材を求
めていた。当時、京大
など日本の植物生態学
は植物の形態・形質に
着目した「植物社会学」
的研究が主流であり、
IBP研究に対して
批判的であった。この
ような学問的背景の中、
光合成・呼吸を基礎
とした物質生産とい

う概念を発展させ「植物社会」を理解するという方法論
を採っていた研究室で植物プランクトンの環境適応の仕
組みを光合成・呼吸過程を通して解析していたことが幸
いして、私を琵琶湖に引き合わせてくれたのである。

晴れてIBP琵琶湖班の一員となり、植物プランクトン
を対象として一次生産に関する研究を分担することにな
った。調査水域は人為的攪乱の最も少ない琵琶湖最北
端に位置する塩津湾であり、好奇心と感動を胸に琵琶湖
の南湖に位置する下阪本から9ノットと船足の遅い調査
船「はす」に乗り1日かけて出かけた。調査が進み、
次々と出てくる分析結果を見てその数値に驚き、調査・
分析に問題があったのではと疑った。植物プランクトン
の一次生産速度、現存量の指標として測定したクロロフ
イル量、懸濁態窒素・リン濃度、そして水中の光減衰に
関する数値は全て貧栄養湖ではなく、中—富栄養湖の特
徴を反映したものであった。琵琶湖に出会う前に琵琶湖
を知る?研究者や学術書から得た情報とは全く違う結果
である。私にとっての琵琶湖は300万年という長い歴史
を生き、50種を超える新しい命(固有種)を創出・維持
してきた世界的にも貴重な古代湖であり、典型的な貧

栄養湖であった筈である。私の赴任した1960年代後半
は琵琶湖に携わってこられて研究者ですら琵琶湖の実態
を把握していなかったように思う。1970年の初夏、琵琶
湖を水源とする京都・大阪の水道水のカビ臭が社会的
問題になって初めて琵琶湖の富栄養化が表面化するので
ある。カビ臭発生に続き1977年、琵琶湖で初めて発生
した淡水赤潮が報道されると、誰彼問わず琵琶湖の富
栄養化は1960年頃から進行してきたと得意顔?であら
ゆるメディアを通して騒ぐようになる。富栄養化を琵琶湖
の深刻な環境問題と市民に訴えてきた当事者の話の内容
にも、琵琶湖の実態をどれほど消化し理解しているか疑
問の残る点が多々あるように思えた。当事者は、誰もが
琵琶湖の富栄養化は1960年頃から始まったと前置きす
る。何を根拠にしているか全く説明が無い。私の調べた
限りでは、1960年以前の琵琶湖の水質に関連する情報
は滋賀県水産試験場の定期観測によるpHと栄養塩濃度

の季節変動のみであ
る。1950年代には夏
のpH値は7.4前後で
あったが1960年代に
入ると8.7と異常に高
まる。これは1960年
代に入ると植物プラン
クトンが増え、光合成
が高くなった結果と考
えられる。富栄養化を
叫ぶ当事者はここまで

琵琶湖の資料を分析されておられたのだろうか?淡水赤
潮の発生も社会的には富栄養化の結果と言われている
が、科学的には全く根拠はない。権威ある人が根拠も無
いまま記述・講演を通して伝えたことが時間と共に一人
歩きし、社会に浸透して行く恐ろしさを実感したのも琵琶
湖との出会いがあったからこそである。また、琵琶湖
は近畿1400万人の水源地である前に、生物の宝庫という
真の価値を失ってはならない。

(京都大学名誉教授・総合地球研究環境学
研究所名誉教授・本学非常勤講師)

随想

琵琶湖との出会い

中西 正己

千里地理通信 第53号

2005年9月15日 発行

関西大学文学部地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学教室内

Tel: 06-6368-1121(内線4890:大学院生室)

e-mail: moto@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/kyoshitsu_site.htm

郵便振替: 大阪 00970-4-81149